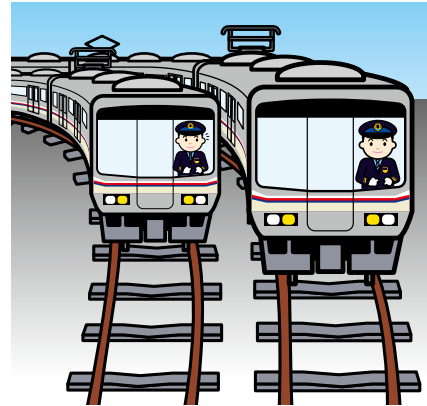


1 私たちが見ているものは事実とは異なるの？

事例

1. 運動における錯覚

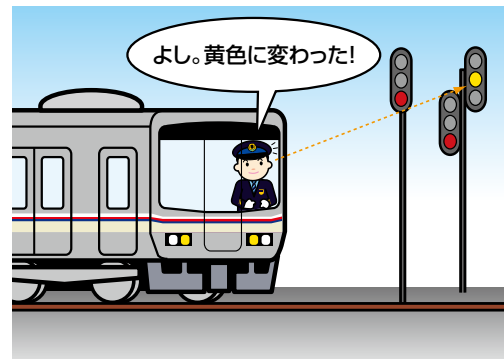
運転士のAさんは、B駅入駅時、隣接線の列車が並行して動きはじめたことに気が付かず、いつもどおり減速していったつもりでしたが思いのほか停止位置目標が早く迫ってきて、あわてて追加ブレーキをとりました。



2. 心理的な影響による錯覚

運転士のCさんは、D駅入駅時、場内信号機が赤信号のため停止していました。少しダイヤが乱れるとこの駅では、いつも場内信号機が赤信号となるものの、先行列車が発発したらすぐに黄信号になっていました。

Cさんはいつものことだと思い、プライベートのことを考えていました。ふと顔を上げると黄信号になっていたので動き出したところ、ATSが動作し非常停止しました。確認したところ隣接線の信号機と見誤っていたことがわかりました。

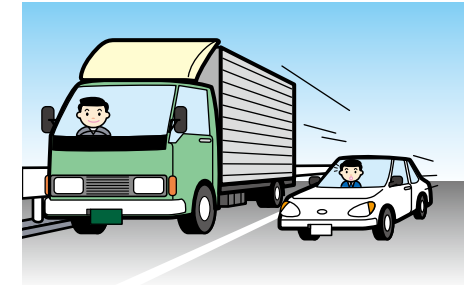


▶ キーワード

錯覚 予想 期待

トラックと並走しているうちに、スピードを出していないつもりが、いつの間にかスピードを出してしまっていたということがありませんか。

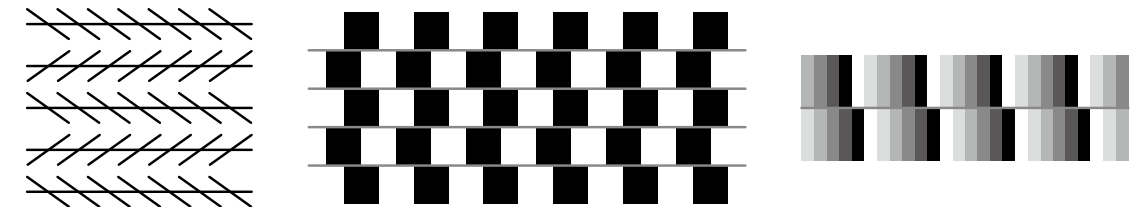
事例2の場合は、運転士が「いつものことだ。すぐに黄信号になるだろう(予想)」「時間どおりに運転したいから黄信号になってほしい(期待)」という思いから、隣の信号機が黄色に変わったのを自らの信号だと勘違いするといった錯覚を引き起こすのです。



このように錯覚は、外的な要因だけでなく受け取る側の心理状態によっても影響を受けます。人間は事実を自分にとって都合の良い方に知覚する傾向があります。

錯覚は、人間の知覚や思考の正常な働きから生まれるものなので、錯覚を防止することは容易ではありません。

さて、下の図の水平線は、全て平行になっています。みなさんは平行に見えますか。

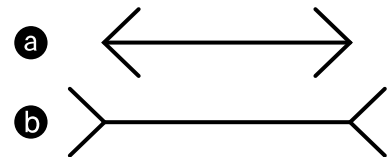


※試しに定規を当てて確認してみてください。

(<http://www.psy.ritsumei.ac.jp/~akitaoka/catalog.html> より改変して引用)

解説

右の図を見てください。
「aとbの横線は、どちらが長いですか？」



答えは「(bの方が長く見えますが)実際は、同じ長さ」です。このように**実際と違うように見えたり聞こえたりする現象を錯覚**といいます。

事例1の場合は、運転士でなくても経験があるはず。高速道路の追い越し車線を運転中、

対策



しっかりと確実に知覚するには、まず人間が**錯覚**するということを認識すべきです。そのうえで、**見間違いを防ぐには「指差喚呼(76ページ)」**などを、**聞き間違いを防ぐには「確認会話」**などを地道に行うことが大切です。なお、あわせて「**錯覚を起こしにくい設備**」にしていくことも必要です。

「自分は、間違えるはずがない。」という思いが最も大きな**錯覚**かもしれませんね。



参考文献 芳賀繁「失敗のメカニズム—忘れ物から巨事故まで」日本出版サービス(2000)/財団法人 鉄道総合技術研究所 監修「安全のキーポイント—ヒューマンエラーの防止—」社団法人日本鉄道運転協会(1989)/北岡明佳「錯視のカatalog」<http://www.psy.ritsumei.ac.jp/~akitaoka/catalog.html>